

平成二十五年年度

日本近世文学会秋季大会

・大会プログラム

・研究発表要旨

期日 十一月十六日(土)・十七日(日)・十八日(月)

会場 三重大学(共通教育校舎一号館

一階 二二〇教室)

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町一五七七

共催 三重大学人文学部

一、出欠の葉書を十月二十一日(月)必着でお出ください。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。

一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(上智大学文学部)へお申し出ください。

一、大会経費は、参加費千円、懇親会費五千円です。

一、送金は同封の振替用紙(口座番号〇〇八四〇一九一二一五〇七九、口座名「吉丸雄哉」)で、十月二十五日(金)までに振り込みをお願いいたします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。

一、大会二日目(十一月十七日)日曜日の昼食に弁当(千円)を用意いたしますので、ご希望の方は同封の振替用紙でご送金ください。大会に不参加で、発表資料をご希望の方は、出欠葉書の当該欄に御記入の上、同封の振替用紙にて、資料請求代千円を払い込んでください。大会終了後、資料を郵送いたします。

一、三日目(十一月十八日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。

一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は「近世文藝」の末尾に綴じ込んでいます。

一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。

一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会秋季三重大学大会事務局

三重大学人文学部文化学科 吉丸雄哉

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町一五七七

電話 〇五九一三三一―九〇九五(直通)

メールアドレス yoshimaru@human.mie-u.ac.jp

日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。
さて、平成二十五年度秋季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成二十五年九月三十日

日本近世文学会秋季大会会場校代表 吉丸雄哉
日本近世文学会事務局代表 木越治

(事務局連絡先)

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町七一
上智大学文学部国文学科 木越研究室内
電話 〇三―三三三八―三六三五
FAX 〇三―六三六九―四二二九
e-mail kigoshi@sophia.ac.jp

【会場】三重大学

【行事】

第一日 十一月十六日(土)

委員会 会 (一一・三〇〇～一三・五〇〇)

委員会会場 共通教育校舎一号館二階 二〇五教室

大会受付 (一三・〇〇〇)

開会時間 (一四・〇〇〇)

研究発表会 (一四・一〇〇～一六・二五)

研究発表会場 共通教育校舎一号館一階 一一〇教室

1 『英草紙』第六篇「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」の典拠について

名古屋大学(院) 劉 菲

2 『世間妾形氣』遊女藤野の人物像―『繁野話』第八「白妙」との対照を手がかりに―

京都大学(院) 野澤 真樹

3 『両総紀行』考―虚構化する紀行、虚構化する人生―

国文学研究資料館(非) 牧野 悟資

4 馬琴作合巻『百物語長者万燈』の改題改刻本『白鼠忠義物語』の稿本

同朋大学 服部 仁

和本リテラシアアンケート報告会 (一六・四〇〇～一七・四〇〇)

懇親会 (一八・〇〇〇～二〇・〇〇〇)

懇親会会場 第一食堂

第二日 十一月十七日(日)

大会受付(九・三〇)

研究発表会 午前の部(一〇・〇〇～一二・一五)

研究発表会会場 共通教育校舎一号館二階 二二〇教室

1 上方版『私可多咄』考

名古屋大学(院) 河村瑛子

2 『藻屑物語』『雨夜物語』諸本考―『男色義理物語』の剽窃箇所をめぐって―

早稲田大学(院) 大友雄輔

3 『俳諧女歌仙』の成立

早稲田大学(院) 木下優

4 芭蕉と奈良の町

和光大学 深沢眞二

昼 休 み(一二・一五～一三・三〇)

編集委員会会場 共通教育校舎一号館二階 二〇五教室

研究発表会 午後の部(一三・三〇～一五・〇〇)

研究発表会会場 共通教育校舎一号館一階 二二〇教室

1 『本朝二十不孝』『我と身を焦がす釜が淵』試論

愛知教育大学(院) 中村雅未

2 享保期江戸歌壇と神田神社

慶應義塾大学斯道文庫 一戸渉

3 琴学の受容と再興に見る近世日本の学術の動向―人見竹洞・荻生徂徠・村井琴山を中心に―

佐賀大学 中尾友香梨

講演(一五・一五～一六・一五)

文芸活動と伊勢商人

南山大学 安田文吉

閉 会(一六・二〇)

第三日 十一月十八日(月)

文学実地踏査 資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。

図書展示 三重の風土と文学

日時 平成二十五年十月二十九日(火)～十一月二十六日(火)

※石水博物館所蔵資料の展示は十一月十三日(水)～十九日(火)

場所 三重大学附属図書館玄関ロビー

『英草紙』第六篇「三人の妓女趣を異にして

各名を成す話」の典拠について

名古屋大学(院) 劉 菲 菲

都賀庭鐘『英草紙』第六篇の典拠としては、従来『青瑣高議』の「王幼玉記」、『諭世明言』の「衆名姫春風巾柳七」の一節等が示されてきた。が、これらよりも『緑窗女史』が典拠としてより適切であると思われる。該書は明の秦淮寓客が編んだ類書で、全十四巻。『船載書目』には日本に舶来した記録が見られぬものの、全国漢籍データベースによれば、明版唐本の伝本が尊経閣文庫、京都大学、大阪府立中之島図書館、内閣文庫、立命館大学に現存する。その巻十二「青楼」の部に王幼玉を含む歴代の名妓の話が収められている。

本発表では、まず第一話の「王幼玉記」を翻案した箇所について、『青瑣高議』やその他の類書に載る王幼玉の話と本文を比較対照し、庭鐘が直接依拠したテキストは『緑窗女史』であることを指摘する。例えば、「只寒中の花の未だ開けざる風情あり」に対応する箇所が『青瑣高議』等では「寒芳未吐」となっているのに対し、『緑窗女史』のみ「寒花未吐」とある。また、「入つては舅姑に事へ」という表現も、『青瑣高議』では「留事舅姑」、一方『緑窗女史』では「入則事舅姑」となっている。

さらに、これまで出典不明とされてきた第二・三話の原拠についても、『緑窗女史』巻十二「青楼」所収の「馬湘蘭伝」にあることを示したい。すなわち、庭鐘は馬湘蘭の人物像を檜垣と鄙路のそれに反映させ、また馬湘蘭にまつわる逸話を第二話と第三話に取り込んでいると見られる。

『世間妾形氣』遊女藤野の人物像

— 『繁野話』第八「白妙」との対照を手がかりに —

京都大学(院) 野 澤 真 樹

上田秋成の二作目の浮世草子、『世間妾形氣』に収められる遊女藤野の話には、男が女に物を打ち明けかねる場面、話の転機における海賊の存在、女が経を写す場面など、都賀庭鐘の『繁野話』第八「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話」を想起させる箇所が散見する。しかし『繁野話』の白妙が安方に裏切られながらも、貞節を守るために入水して自ら命を絶つたのに対し、『世間妾形氣』の藤野は夫である才太郎の死を知った後も、生きて遊女としての年季を勤めあげることを選ぶ。ここでの藤野の決断は、『繁野話』の白妙とは対照的である。

上田秋成の後の作品には「烈女」と評される女がしばしば登場する。貞節のために命を絶つた『繁野話』の白妙が「烈女」にあたるのに対し、藤野の選択は「烈女」のそれとはほど遠い。

話の終盤で、親方の岸屋は、夫の死を知り泣き惑う藤野を「女ゴらしき人」と表現する。秋成の意図する「女ゴらしき」とはどいういったものか。彼は後に『ますらを物語』で登場人物の言を借り、「烈女」は「をみなしからぬもの」であると述べている。岸屋の「女ゴらしき人」という言葉は、夫を一途に思い続ける藤野を称賛するとともに、「烈女」である白妙のように貞節を守って死を選ぶのではなく、遊女として身の「貞節」を擲ってでも、生きて亡き夫と主人への「義理」を全うする藤野の在り方を言い表したものである。

『両総紀行』考

— 虚構化する紀行、虚構化する人生 —

国文学研究資料館(非) 牧野悟資

国文学研究資料館蔵『両総紀行』は、歌枕の旅に出ることを思いついた二代目算木有政が、文化元年三月一〇日に下総国海上郡成田村の白庵を出発し、同月一八日にかけて上総国武射郡屋形村までの道中に住む知人達を訪問して回った際の紀行である。

『若樹文庫取得書目』は、この作品を大正四年に入手した大野酒竹の旧蔵書で、「真顔自筆文化元年三月ノ紀行」とする。さらに昭和一一年一月に文行堂主催古書入札交換会に出品され、川瀬一馬によって落札されたことが、添付された備忘録から分かる。会の時に付されていた野崎左文筆のたすきには、「真顔翁両総紀行稿本 林若樹氏出品」とある。

本発表では、まずこの作品が二代目算木有政の作品であることを確認し、行程及び内容から『常総庵有政陽炎日記』の冒頭部分であることを明らかにする。次に行脚する狂歌師の地方における活動実態が垣間見られるなど、その史料としての有用性を明らかにする。一方で、旅立ちとそれに伴う回顧・惜別という明確な主題があり、しかもその主題のために創作されたと思われる内容を含む、極めて文学的な作品であることを指摘する。また、有政は後に荷田(羽倉)訓之を名乗り、荷田春満(蒼生子)の子孫の如く振る舞うが、周辺資料から詐称の可能性が高いことを明らかにし、本作品にその萌芽が見出せることを指摘する。

馬琴作合巻『百物語長者万燈』の

改題改刻本『白鼠忠義物語』の稿本

同朋大学 服部 仁

文化十四年正月岩戸屋喜三郎刊『百物語長者万燈』(曲亭馬琴作、勝川春亭画)という合巻の改題改刻本が、天保十五年正月菊屋幸三郎刊『白鼠忠義物語』(曲亭馬琴作、歌川貞重画)という合巻である。両者の大きな相違点は四点ある。

まず第一は、『百物語長者万燈』という題を『白鼠忠義物語』に改題したこと。第二の違いは画師が勝川春亭から歌川貞重に変更されたことに伴い、表紙画、挿画が改変されたこと。第三の違いは『百物語長者万燈』が二巻六冊三十丁であるのに対して、『白鼠忠義物語』は三巻六冊二十九丁という合巻としては変則的な体裁(普通は五丁の倍数)であること。第四の違いは、改刻に当たって本文を多少改変、削除したこと、という四点である。第二の『白鼠忠義物語』の表紙がとも合巻の表紙とは思えないほど地味になっていること、第三の『白鼠忠義物語』が全二十九丁という変則的な体裁になってしまったことは、天保改革の影響をまともに受けたからであること、間違いない。

先般、これらの合巻のいずれかの草稿本と思われる『観潮閣文庫』(森鷗外)「牽舟文庫」(森鷗外、あるいは弟森潤三郎)という蔵書印が捺してある羽鳥孝明氏蔵の写本を寓目することを得た。馬琴の筆跡ではないので、おそらく『白鼠忠義物語』の草稿本と考えられるが、『百物語長者万燈』、草稿本、『白鼠忠義物語』の三本を比較検討することによって、改題改刻本製作の際に必然的に起こる変化について見てみる。

上方版『私可多咄』考

名古屋大学(院) 河村 瑛子

中川喜雲の著した『私可多咄』は、初期の断本として重要であるが、万治二年九月の上方版は所在不明で、寛文十一年の江戸鱗形屋版のみが現存する。その書名は、後年の元禄頃隆盛を迎えることとなる「仕形咄」(ト書き風の説明を省略し、身振りを変えて表現する一人芝居的な話芸)を意味するものの、内容的にはその要素が希薄であると従来指摘されている。

山東京伝『骨董集』が引用する上方版の一部と、該当する江戸版の本文との間には看過しがたい異同がある。さらに、万治二年九月の書写奥書を持つ『徳元玄札両吟百韻』(天理図書館蔵)は、尾張鳴海の富豪俳人、下里知足の自筆で、表題の百韻の外に、俳諧・和歌・笑話・書籍目録等を含む雑記であるが、同書に引く笑話四十二話のうち、四十一話が江戸版『私可多咄』の内容に共通し、しかも大きな異同がある。『徳元玄札両吟百韻』所収話は、江戸版に比してト書きが極端に少なく、成立時期より見ても、失われた上方版『私可多咄』より抄出したものと推定される。

一般に、近世前期における上方咄本の江戸重版では、話の追加や削除、文辞の変更を行うことがある。上方版『私可多咄』は、当時の仕形咄の世界を写実的に文章化した書であったが、江戸ではその試みが理解されずに本文が改変されたと考えられる。すなわち、上方版『私可多咄』は、書名にふさわしい文学的先進性を有した可能性がある。

『藻屑物語』『雨夜物語』諸本考

―『男色義理物語』の剽窃箇所をめぐる―

早稲田大学(院) 大友 雄輔

寛永十七年に起きた浅草慶養寺における伊丹右京・舟川采女兩名の自刃という実事件に取材した作品が、『藻屑物語』およびその異本とされる『雨夜物語』である。この二作品は写本でのみ伝わっているが、山の八『風流嵯峨紅葉』や石川流宣『好色江戸むらさき』、西鶴『男色大鑑』、作者不詳『男色義理物語』等、本文の剽窃を含んだ多くの影響作品がみられる。一方、本作についての研究は少なく、『藻屑物語』のテキストとしては、早大蔵馬琴筆写本が主に用いられてきた。

しかしながら、現存する『藻屑物語』六部『雨夜物語』三部を校合した結果、この早大本を『藻屑物語』の代表的テキストとすることには問題があるという結論にいたった。管見の『藻屑物語』六部の写本のうち、早大本・東大本・吉田幸一氏旧蔵本の三部(A群)は、前書の内容及び本文の比較から、東大本に写された天明五年筆写本以前には書写時期を遡ることができないことがわかった。残る神宮文庫本・中之島図書館本・筑波大本の三部(B群)は、このA群の写本とは異同が多く、むしろ『雨夜物語』に近い本文をもつ。だがB群の写本には、A群にも『雨夜物語』にも含まれていない叙述が存在する。元禄十六年刊の『男色義理物語』がその部分を含めて、B群の本文をほぼ全文にわたって剽窃していることから、B群の写本こそが、祖本に近い『藻屑物語』であると考える。

『俳諧女歌仙』の成立

早稲田大学(院) 木下 優

『俳諧女歌仙』は貞享元年に刊行された西鶴自画自筆本である。現在まで姿絵の一部の研究がわずかにあるものの、その成立や編纂様式には、あまり言及されてこなかった。岡本勝氏の『古今俳諧女歌仙』の挿絵(『近世文学論叢』所収・二〇〇九)では『新女歌仙』『続女歌仙』(寛文元年)との類似が指摘されたが、本発表では両書よりも菱川師宣の『団扇絵づくし』(天和二年)に、前書きと姿絵の類似があることを指摘する。『西鶴諸国はなし』(貞享二年刊)には、師宣画の影響が指摘されてきたが、『俳諧女歌仙』成立においても師宣作品の影響が認められるならば、「『女歌仙』を『手本』にしてよりかかった形で作り上げた」とする岡本氏の論を再考する必要がある。

また、本作品の姿絵に施された花模様には『好色一代男』と『高名集』に全く同じ図柄が見え、この花模様は天和二年に西鶴が好んで描いたと見える。このことから、本作品の成立時期は刊行年を遡って、前述二作と近い時期に描かれた可能性が高い。さらに、『俳諧女歌仙』に収められた作者の他作品における入集状況を調査した結果、どの俳書にも署名が無く西鶴の生存期間よりもかなり前に存在した人物が見える他、実在した事実さえ怪しい作者を数名含む。本作品は西鶴の創作による作句や人物が混在すると推察される。

芭蕉と奈良の町

和光大学 深沢 眞二

元禄七年九月九日に奈良で詠まれた芭蕉発句、

菊の香や奈良には古き仏達 (『笈日記』)

は、旅程などから見て、奈良の仏像群を拝観しての作ではありえない。これは、『和漢朗詠集』所収『阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわがたつ袖に冥加あらせたまへ』伝教大師の歌を背景にして解釈すべきである。この歌は、酒吞童子物の室町物語や能に取り込まれて広まった。さらには、『俳諧類船集』に「我立袖」の項目があり付合語として「仏たち」が登録されているなど、近世初期俳諧におけるさかんな利用が確認できる。そうした見地から「今日は重陽、菊の節句。折から奈良の町には菊の香が漂っている。伝教大師が比叡山で『冥加』を求めた『仏達』と同じように、目には見えなくとも、きっと、奈良の町には古き『仏達』がおわして町を守護しているのである。菊の香は、この奈良の町に『仏達』がおわしますことを示しているかのようだ」と、芭蕉の発句を解釈することを提案する。

なお、芭蕉がこの年「奈良の旧都の重陽をかけんと」(『笈日記』)したのは、前年十月九日の素堂亭における「菊園之遊」の雅会の影響があったと思われる。芭蕉は素堂の影響の下に重陽の味わいを認識し、元禄七年の重陽を迎えるにふさわしい場所として「旧都」である奈良を選んだ。また、奈良に関わる芭蕉の詠作を見わたすと、何よりもまず奈良の古雅な(町並み)をこそ、賞美する傾向が認められるのである。

『本朝二十不孝』「我と身を焦がす釜が淵」試論

愛知教育大学(院) 中 村 雅 未

本発表では、『本朝二十不孝』の中で「唯一のモデル明示の章」と指摘されている巻二の「我と身を焦がす釜が淵」を検討する。この話では、子・父・盗賊としての三つの側面から独自の石川五右衛門像が提示されているが、はじめに、これまであまり注目されることのなかった、「盗跖・長範」に勝る盗賊と記されている点を検討する。

まず五右衛門の仲間の名を列挙する趣向と謡曲『熊坂』、幸若舞曲『烏帽子折』との関連を明らかにする。また、「盗跖」の名から想起される、『莊子』雑篇・盗跖第二十九、すなわち「孔子の倒れ」のエピソードと本話の五太夫の異見の場面を関連させつつ論じる。この盗跖第二十九の日本における受容史を視野に入れ、特に『宇治拾遺物語』最終話に注目して本話を解釈することで、本話における観衆の反応の独自性と五太夫の異見の両義性(子への心配／不道徳)が浮かび上がることが示したい。

その上で、処刑の場面における観衆を松本治太夫正本『石川五右衛門』とは対照的に五右衛門を嘲笑するものとしたことが、かえって「五右衛門の妻子への一抹の愛情」という読みを捨象しがたくさせている点を検討し、併せて大悪人石川五右衛門とその被害を受けた父親という構図を再考したい。

享保期江戸歌壇と神田神社

慶應義塾大学斯道文庫 一 戸 渉

『波那乃枝折』と題された近代写本(発表者架蔵)の中に、神田神社神主芝崎好安(好高亭)において享保十年三月二十二日に催された新出の歌会記録が収められている。芝崎家は荷田春満の江戸滞在中の強力な後援者であったが、当該歌会には同家をはじめとする神田神社社家の面々に加えて、江戸小石川御薬園預にして中院通茂門の江戸堂上派歌人芥川元風、水戸藩医で護國派詩人とも交渉のある吉田慎斎、書家で成島信遍とも親しい曹洞宗の東湖和尚らの名が見える。近時、調査が進んでいる東丸神社所蔵資料中にも上記の人名が確認されることから、彼らは神田神社を拠点のひとつとして春満らと共に雅交に興じていた集団と目される。

本発表では、彼ら春満門弟ないしその周辺人物のうち、絵入教訓書『君臣和合物語』(享保三年刊)及び『茗荷艸』(享保十五年刊)、法帖兼漢詩集『和寒山詩』(元文四年刊)等の著作がある東湖和尚に焦点をあて、松風也軒撰『今代和歌渚の松』(寛延元年刊)に春満や東湖らの和歌が収録されていることなどを手掛かりに、東湖の伝記と交友圏の広がりを解明する。

更にそのことを通じて、従来江戸での古学発祥の拠点と捉えられてきた神田神社という場を、享保期前後に江戸堂上派歌人と春満一門とが近接していた場として捉え返すことで、江戸歌壇史における真淵登場前夜の実態解明を試みたい。

琴学の受容と再興に見る近世日本の学術の動向

— 人見竹洞・荻生徂徠・村井琴山を中心に —

佐賀大学 中 尾 友香梨

文人の嗜むべき「琴棋書画」の一つに数えられる七絃琴が、奈良時代に中国より伝来して平安貴族の間でもはやされ、後に衰退して伝承を失ったが、江戸初期に明僧東臯心越が来日したことにより再興を見たことは、周知のとおりである。

江戸時代に琴を嗜んだ者は数多く、その身分もさまざまである。したがって同じく心越の伝えた明代琴楽に対する彼らの認識と受容態度は、必ずしも一様ではなく、それはまた各人が生きた時代の潮流及び彼らが信奉した学問・思想体系とも密接に関わる問題である。しかし昨今の学界において、琴学そのものに対する研究自体まだ活発に行われているとは言い難く、琴学の受容を近世の学術の動向の中で考える視点も著しく欠けていると言わざるを得ない。

そこで、本発表では、琴学受容史において重要な意味をもつ三人の人物を中心に、彼らによる琴学受容を当時の時代背景及びそれぞれの学問体系の文脈の中で論じることを試みる。少し具体的に述べれば、まず江戸前期の人見竹洞については、その琴学受容に儒仏道の三教一致への是認が認められること、また中国の琴学はかなり屈折した形で近世日本に受け入れられたが、そのきっかけをつくった一人が竹洞であることに注目し、江戸中期の荻生徂徠については、その琴学専論とも言うべき『琴学大意抄』がどのような経緯と意図のもとに著されたかを論じ、さらに江戸後期の村井琴山については、その実学思想が琴学受容に与えた影響について論じることを通して、そこから見えて来る近世日本の学術の展開を読み取ることを目的とする。

(講演) 文芸活動と伊勢商人

南山大学 安田 文吉

三重県津市にある「公益財団法人石水博物館」は、川喜田家十六代当主半泥子が、昭和五年に千歳山の邸宅内に設立したものの。川喜田家は津を根拠地に江戸・京に店を構えて木綿問屋を営んだ伊勢商人である。八代久太夫政美までは本業に励み、基礎を固めたが、九代久太夫光盛(爾然斎)以降は、本業の傍ら文芸活動にも力を注いだ。歴代各々が自らの興味に従って、和歌、俳諧、国学、茶道、本草学などに勤しみ、資料の収集にも力を注ぎ、後継者がこれを継承・保管することに努めた。近代に到っても、十六代半泥子の陶芸、松坂の長井家の演劇資料の買い取りなどその活動は衰えなかつた。本業の商業資料を含め、歴代当主の収集、制作したあらゆる方面に亘る資料が、石水博物館に収められている。文芸関係資料については故岡本勝氏がその全貌を把握すべく、目録作成を目指して調査を続けておられたが、今回、私が代表者となり「江戸時代伊勢商人の文芸活動の研究―石水博物館(津市)所蔵文献資料を手がかりに」の課題で平成21〜24年度科学研究費補助金(基盤研究B)を受け、近世文化の担い手であった豪商の足跡、特に伊勢を拠点に東西の文化に拘わった川喜田家の活動という視点で、石水博物館の所蔵資料の調査・研究を行い、馬琴の newly 著作をはじめとする近世及び中世・中古に及ぶ文学芸能の new 資料が確認され、一部は公刊、報告した。資料は膨大で未だ全貌を把握するに至っていないが、所蔵資料の特性を中心にお話しをした。

MEMO

MEMO

